

「デジタルシフト」

桑田 直宏

これまでは眼視にこだわり、「天体は自分の目で見るのが一番！」と言ってきたのですが、年齢からくる視力の衰えと白内障の進行により、例えば系外星雲を見たとき、10年前にはよく見えた印象がある天体が、まるでサングラスを通して見ているかのように暗く、よく見えなくなりました。

月惑星も、特に高倍率で木星を見ると、惑星の表面にいっぱい黒いものや泡のようなものが飛び回るようになった。その対策として、テレビューの双眼装置を使って両目で見ることで不快な黒いものは軽減されたが、暗い系外星雲はどうしようもありません。そこで、昨年よりデジタルシフトを進めています。

1. 電視観望

望遠鏡に ZWO 社の ASI294MCPro の冷却カメラを取り付け、数十秒露出した画像を何枚かスタッキングして、その場でモニターから見るという新しい観望方法です。昨年から何度か試してみましたが、今の天体写真が何時間も露出することを考えると、手軽で、すぐに天体を確認することができるので、これから私のスタイルになると思います。

40 センチの口径を生かせる惑星状星雲に今年はチャレンジします。

2. 流星写真

播磨自然高原の夜空は、とくに北の空が暗くて視界も開けています。これまでも何度かここで流星群を観望してきましたが、最近は徹夜すると数日は体調に影響が出るようになりました。若いときは徹夜で天体観測して、朝はそのままゴルフに行ったこともありましたが、...

そこで、ミラーレスカメラに明るい広角レンズをつけて、60 秒露出で ISO 感度をできるだけ高くし、それを何百枚と撮影して、流星が写っている画像だけを比較明で処理するというデジタルカメラならではの流星撮影方法です。

カメラが勝手に撮影してくれるので体への負担もなく、これならできそうです。

とりあえず、8月のペルセウス座流星群と最高条件になる12月のふたご座流星群でチャレンジします。よかったら、どなたかお付き合いください。

